

ともに考え、活動し、成長する博物館にむけて

・新県立博物館の建物工事が始まりました！
…P1

・みんなでつくる博物館会議 2010
…P2

・サポートスタッフ活動
…P3

子どもが主役の博物館づくり
・こども会議
…P4

・博物館きわめるプロジェクト
…P5

・研究フォーラム
…P5

・移動展示事業
…P6

・新県立博物館のみどころ・ご利用ポイント紹介
…P7

・三重大学との連携シンポジウムを開催
…P8

・お知らせ …P8

新県立博物館の建物工事が始まりました！



1月28日の起工式の様子

新県立博物館の本体工事の起工式が、去る1月28日に行われ、いよいよ工事が始まりました。起工式には知事、県議会議長も出席され、鍬(くわ)入れ式が行われました。

今後は、既に始まっている土留め・掘削工事の後、鉄骨を組んだり、コンクリートの打設などを平成24年(2012年)の夏頃まで行います。引き続き、内装工事・外装工事などを行い、建物は、平成25年(2013年)4月中旬頃までに完成する予定です。あわせて展示工事や外構工事などを行うとともに、引っ越しなどの開館直前の準備も行います。平成26年(2014年)の開館をめざして着実に整備を進めていきます。



2月頃の工事の様子

工事にあたっては、建築、電気設備、空調設備、給排水衛生設備という4つの工事の施工者や工事監理者、さらにさまざまな関係会社など、たくさんの方たちが携わり、1つの建物を作り上げていくことになります。安全を第一に、一致協力して、素晴らしい博物館にしていきたいと思えます。



建物完成予想模型(ミュージアムフィールド側から)

みんなで作る博物館会議2010

新県立博物館に向けた取組の進捗状況を県民のみなさんに報告し、広く意見交換を行う場として昨年度から開催しています。今年度は2月13日(日)に三重県総合文化センターで「見るだけじゃない、調べる・考える・体験する博物館—新県立博物館の活用法を考える—」をテーマに開催しました。

新県立博物館の進捗状況をご説明し、以下の3つの企画で構成しました。

「博物館を活かして使う達人に聞く!」の講演会

滋賀県立琵琶湖博物館、斎宮歴史博物館、現三重県立博物館それぞれに現在関わって活動されている3名の方から、博物館を利用したきっかけや自分がワクワクして活動していること、新県立博物館への要望や期待をお話いただきました。

「フィールドレポーターは、利用者が自分の住んでいる地域で、企画段階から主体的に楽しく活動でき、地域がわかってくる取組です」と琵琶湖博物館の達人。「敷居の低い利用しやすい博物館を」と斎宮歴史博と関わる斎宮(いつきのみや)ガイドボランティア。現県立博物館のサポートスタッフ(以下サポスタ)からは、「世代を超えた交流とアバウトさのある活動が参加しやすい」といったご意見がありました。

パネルを見ながら交流会!

交流会では、サポスタのみなさんが作成した各グループ活動や、新県立博物館の取組内容を紹介する展示ブースをまわりながら、参加者同士あるいは、参加者と発表者との自由な形での意見交換を行いました。サポスタの展示ブースには、ゾウ化石の実物に触れる展示や、グループ活動で染色した服、昆虫標本なども展示されました。



琵琶湖博物館フィールドレポーターの講演



意見交換会で司会をする山田さん



パネルを見ながら交流会



意見交換会「新博物館で、こうしょ、ああしょ」

意見交換会「新博物館で、こうしょ、ああしょ!」

会議の後半は、三重大学教育学部教授の山田康彦さんの進行のもと、コメンテーターとして布谷知夫顧問が加わり、参加者のみなさんと意見交換を行いました。みなさんからは、

「新県立博物館の情報誌を自分たちでつくりたい」、「ナイトミュージアムを企画してほしい」、「地域の活動の成果を展示し、地域ごとに“研究会”ができる支援をしてほしい」、「月曜日は開館してほしい」などたくさんの意見が出されました。

みんなで作る博物館会議の今後は?

今回は、95名の方にご参加いただきました。この会議は、開館後に博物館の運営に対して、県民のみなさんと一緒に意見を交換する場となります。開館までの間、試行錯誤を重ねながら毎年開催し、魅力ある

「みんなで作る博物館会議」にしていきます。



「みんなで作る博物館会議」参加記念バッジ

三重の新県立博物館はここにある ～サポートスタッフ活動～

サポートスタッフとは、みなさんが博物館でやってみたいことを実現するきっかけとなる活動です。新しい博物館ができるというまたとないこのチャンスに、ワクワクする新しい三重の博物館づくりに参加しませんか。

サポートスタッフって？

県立博物館では、平成18年度からサポートスタッフの活動を展開してきました。この活動に参加することで、博物館が行っている自然と歴史・文化に関する調査・研究、資料の収集、展示などの博物館活動に関わることができます。

そして、グループ活動などへの参加によって、自ら

の知識や技能を深めるとともに、世代や興味関心を越えた交流や、地域のすばらしさの再発見などを体感できます。この活動をとおして、三重の自然と歴史・文化をより身近に感じることができ、いろいろな興味関心をさらにふくらませる場が生まれることで、みなさん自身の活動の舞台を博物館につくることができます。



調査活動の風景



展示作業の様子



グループ活動でのフィールドワーク



子ども向けイベントの様子

活動内容

現在は、小学生から80代までの約230名のみなさんがそれぞれの興味や関心にあわせて、活動していただいています。博物館の活動や資料の取り扱いについて知ることができる「研修会」や、県内各地で開催する移動展示、博物館教室・フィールドワークなどの博物館企画を一緒になって作りあげる「スタッフ協力」を行っています。

また、さまざまな興味関心をもった仲間が集まる分野別の「グループ活動」も盛んです。現在は、歴史、民俗、織物・染色、生きもの、化石・鉱物の分野ごとのグループのほか、サポスタ情報局やおもしろ博物館づくりグループもあります。情報局では、サポスタ通信なども発行しています。おもしろ博物館づくりグループでは、子どもと一緒に楽しめる博物館活動の企画を行って

ます。さらに、これから博物館でやってみたい活動を、みなさんが新しくつくっていくことも可能です。

新県立博物館に向けた取組

サポートスタッフ活動は、「三重の自然と歴史・文化」を育み、「ともに考え、活動し、成長する博物館」をめざす三重の新県立博物館の柱の一つです。新しい活動の舞台である

新県立博物館へ向け、すでにサポートスタッフ活動は始まっています。博物館や各地域を拠点として活動する仲間になっていただけるみなさんをサポートスタッフ一同お待ちしております。



サポスタ通信

※平成23年度もサポートスタッフの募集をおこないます。詳細は県立博物館のホームページが、募集パンフレットをご覧ください。

子どもが主役の博物館づくり

—平成22年度文化庁美術館・歴史博物館活動基盤整備支援事業—



子どもたちが楽しく学びながら、友だちができるような博物館をつくるために、三重県では、平成21年度から文化庁の支援を得て「子どもが主役の博物館づくり事業」を実施しています。今年度は県立博物館サポートスタッフや県内の博物館とともに、子どもたちを対象としたプロジェクトやこども会議、研究フォーラムを実施しました。



ポスターの前で、野呂知事と意見交換

こども会議

新県立博物館では、子どもたちと一緒に博物館をつくることを大切に考え、子どもたちに新しい県立博物館への期待や希望を語ってもらう「みんなでつくる博物館 こども会議」を開催しています。



新県立博物館のキャラクターの名前は？

こども会議のバッジも
つくりました



みんなの前で発表

こども会議は、11月28日（日）に三重県総合文化センターで行いました。当日は、今年度の「博物館きわめるプロジェクト」や「新博ティーンズプロジェクト」に参加した子どもたちをはじめ、100人近い子どもと大人でにぎわいました。

活動成果を発表

まず、これらのプロジェクトで博物館の展示づくりを体験したり、学芸員と一緒に地域の宝ものについて調べたりした子どもたちが、感じたことや考えたことを、みんなの前で発表しました。

ポスター発表

その後、各グループの活動成果をまとめたポスターの前で、発表者と自由に意見交換をしました。

発表についての意見や

感想などを付箋（ふせん）に書いて発表グループに渡すとシールがもらえるので、子どもも大人も一緒になってシールを集めながら、楽しそうに対話をして交流を深めていました。

みんなで座談会

会の最後には、知事を含めた大人も交えて座談会を行い、新県立博物館への期待などをわいわい話し合いました。子どもたちからは、「誰もが行きやすい博物館にしてほしい」「生きものを飼ってほしい」などの意見が出されました。また、大人からも、「学芸員と子どもたちとの距離が近い博物館にしてほしい」など、多くの積極的な意見をいただき、新県立博物館に向けての夢が広がりました。



布谷顧問に質問!

博物館きわめるプロジェクト「展示って何だろう？」

子どもたちが博物館とはどのようなところかを知り、親しみを持つきっかけにすることをめざして、子ども対象のワークショップを実施しました。



ふでばこてらんらん会



ワクワク博物館のつくりかた



またまた パッチつくりました!

「モノって何だろう？」をテーマに実施した平成21年度に引き続き、今年度は「展示」を主題にして、子ども向けのワークショップを実施しました。

昨年度もお世話になった佐藤優香さん（国立歴史民俗博物館助教）と塩瀬隆之さん（京都大学総合博物館准教授）を講師に迎え、子どもと博物館をつなぐ博物館活動の展開に向け、試行的に取り組んだものです。実施にあたっては、県立博物館サポートスタッフとも協働して取り組み、ワークショップについて学ぶ事前研修会を行いました。また、ワークショップ実施後に行ったサポートスタッフ企画講座「正月飾りづくり」にその成果を反映させました。

ふでばこてらんらん会

11月7日に実施した「ふでばこてらんらん会」では、ふだん使っているふでばこを持ち寄った19人の子どもたちが、二人一組になって、ふでばこの中身を調べ合いました。そして、相手のふでばこを紹介するミニ展示をつくり、みんなで展覧会をして鑑賞しました。

ワクワク博物館のつくりかた

また12月5日の「ワクワク博物館のつくりかた」では、参加した31名の子どもたちが、県立博物館に隣接する津偕楽公園を探検して、見つけた葉っぱや小石など、ワクワクしたものを小さなハコの中に入れて一人ひとりのミニ博物館（ハコブツカン）をつくりました。これは、おうち

の人へのプレゼントにもなりました。

子どもたちは、ワークショップに参加して、自分のこと、友だちのこと、博物館のことなど、いろいろな発見をし、伝えることのおもしろさを実感できたようです。



サポートスタッフ企画講座「正月飾りづくり」

新博ティーンズプロジェクト

新県立博物館 NEWS 5号で紹介していますが、子どもが主役の博物館づくり事業のもう一つのプロジェクト、『新博ティーンズプロジェクト「おとなになっても残しておきたい地域の宝・魅力さがし」』も行っていきます。

研究フォーラム「子どもが主役となる博物館を考える」

子どもにとって博物館はどのような場であるべきか、どのような役割を果たすべきかについて考える研究フォーラムを開催しました。

1月15日、三重県博物館協会との共催により、子どもたちが、学校での利用とは違う、家族や地域の中での博物館の利用、さらには子どもたち自身による主体的な博物館の活用について考えを深めていくための研究フォーラムを開



情報交換の様子

催しました。

当日は、まず「博物館きわめるプロジェクト」の講師をお願いした塩瀬隆之さんによる講演「毎日ワクワクする博物館をつくらう!～教えない博物館をめざして」の後、鈴木有紀さん（愛媛県美術館学芸員）、井島真知さん（林原自然科学博物館エデュケーター）、嵯峨創平さん（NPO 法人環境文化のための対話研究所 代表理

事）、平賀大蔵さん（海の博物館学芸員）に子どもを対象とした活動事例報告をいただきました。

後半は、布谷知夫顧問の進行により、会場からの意見も交えながら熱心な討論が行われました。

当日は、県内外の博物館関係者や博物館に関心のある方など82名のみなさんに出席いただき、講師、報告者と出席者の情報交換の時間も設け、交

流の輪を広げることができました。



講演会の様子



討論の様子

博物館の資料と展示活動を身近に感じていただくために **—移動展示事業—**

移動展示「くらしの道具 いま・むかし」(平成23年1月22日～2月20日)を桑名市多度町のふるさと多度文学館で開催しました。今回は、地域の小学校やまちかど博物館などとともに、新しい県立博物館が推進する「多様な主体との連携」による展示を実践しました。



展示室の様子

たくさんの「！」と「？」

「あ～あったわね、これ！」や「おかあさん、これなに？」など、見学に来た1,783人分の「！」と「？」を集めた今回の移動展示では、明治時代から現在に至るくらしの道具の中から、特に昭和30年代から40年代頃の資料を中心に

紹介しました。

道具の形や素材の変化を通じて、便利になった私たちのくらしを振り返るとともに、「大量生産、大量消費」などという言葉が象徴する“使い捨て”の時代の陰で、失われつつある伝統的な技術や文化にも目を向けました。



展示室の様子

展示に深みと親近感が

桑名市多度町内の小学校5校の3年生の皆さんには、移動展示を「昔の道具」の調べ学習の成果発表の機会と位置付け、取り組んでいただきました。昔の道具に関する聞き取り調査、比較や体験を通じてわかったこと等をまとめたレポートを、資料の解説として展示資料とともに掲示す

る手法です。児童のみなさんに「見て」もらうだけでなく、展示の一角を「構成」してもらうものです。

体験や聞き取りなどを通じて得られた21世紀世代のことばには、「モノ」に対する見方や感覚の違いなど、気付かされることがたくさんあり、それは展示に深みをもたらしてくれました。

経験者は解説者

展示会場では、現博物館のサポートスタッフの方々や受付業務をお願いしたシルバー人材センターの方々、ご自分の経験を中心に対話式の解説を行っていただきました。

また、親から子へ、高齢者の方々からそのお孫さんへの“展示解説会”も、自然とあちらこちらで開催さ

れていました。世代間交流の機会にもなったようです。



展示解説の様子



市橋さんによる講演会

関連行事でご意見をいただきました

記念講演会では、北名古屋市歴史民俗資料館学芸員の市橋芳則さんをお招きし、民俗資料の新しい活用方法についてお話いただきました。博物館では、道具は残せても、使い方や使っていた人の思い出までは、なかなか残すことができません。それを補い、あわせて高齢者の社会参加と健康増進にも役立つのが、民俗資料を用いた伝承学習や回想法であることを、先進的な取組

を行っている北名古屋市の事例などをもとに教えていただきました。

また、学芸員による展示解説ツアーでは、「お菓子の道具と、その道具から作られるお菓子はあわせて展示するのがふさわしい」や「その道具を使っている場面を再現して欲しい」など、さまざまなご意見をいただきました。これからの移動展示や新しい県立博物館での展示活動を考えていく参考とさせていただきます。



石臼で粉ひき体験!



展示解説ツアーの様子



またまた パッチつくりました!
水色・黄色・ピンクの3色があります。

～新県立博物館のみどころ・ご利用ポイント紹介～

このページでは、新県立博物館のさまざまなコーナーの魅力について、シリーズで紹介していきます。



今回はココ

雨と緑の宝箱 ～多雨が支える大杉谷・大台ヶ原の森～

清流「宮川」の源流には、深い峡谷に多くの滝がかかる大杉谷と、三重県最高峰の大台ヶ原山があります。基本展示室のこのコーナーでは、日本有数の豊富な雨と複雑な地形によって生み出された他の地域にはない原生林と、森とともに育まれた多様な生きものを紹介します。

ここにしかない原生林

何百年以上も人が手を加えない森を原生林といいます。このような原生林は今の日本にはほとんど残っていません。しかし、三重の宮川源流には大杉谷と大台ヶ原という国内でも有数の原生林があります。日本で見られる原生林は、気温の影響で変わり、暖かい地域から寒い地域に対応して、常緑広葉樹林（シイ・

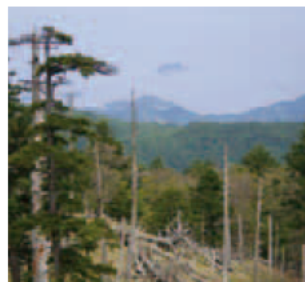
カシ林）、落葉広葉樹林（ブナ林）、針葉樹林（トウヒ林）と、地域ごとの原生林が現れます。本来これらの原生林は別々の地域にあるものですが、大杉谷と大台ヶ原では標高の低い場所から1,500mを超える高地まで原生林が連続しており、せまい地域内に三つの異なる原生林があるぜいたくな場所となっています。



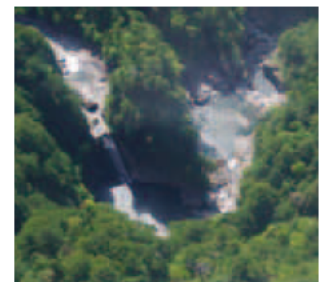
霧湧き上がる大杉谷のシシ淵



大台ヶ原のブナ林



大台ヶ原のトウヒ林から熊野灘を望む



大杉谷の七ツ釜滝

月に35日の雨が降る

太平洋からの湿った南風は、立ちのぼる大台ヶ原山によって上昇し、冷やされることで雲となり、大杉谷と大台ヶ原に大量の雨を降らせませす。年間降水量は4,500mmを超え、その多さから「月に35日の雨が降る」とまで言われています。

多雨による大量の水で削

られた深い谷には、嵩（くら）と呼ばれる岩やいくつもの滝が見られます。そして、雨や深い谷により高い湿度がたもたれることで、岩上や崖にもコケにおおわれた湿潤な森が広がっています。森はここにくらす多様な生きものと雨によって育まれ、大杉谷と大台ヶ原ならではの風景をつくりました。

日本のなりたちを語る生きもの

日本列島は長い地球の歴史の中で、地殻変動や海面の変化により形づくられました。これに気候の変化などが加わり、長い年月の間に生きものたちは分布の拡大や絶滅を繰り返してきました。これにより生まれた特徴ある分布をもつ生きものは、紀伊半島でも見ることが出来ます。例えば、本来見られる寒い地域から

遠くはなれた大台ヶ原山頂部にあるトウヒ林（針葉樹林）、アジア大陸に起源を持つ植物として太平洋岸沿いに中国南西部から紀伊半島へ帯状に見られるヒメシャラ、そして、仲間が海を隔てた九州・四国にいるオオダイガハラサンショウウオ。これらの生きものは、私たちに日本列島のなりたちを伝える存在として、いまでも大杉谷や大台ヶ原にいらしています。

三重大学との連携シンポジウムを開催

12月4日(土)、津市羽所町のアスト津アストホールにおいて、「博物館、大学、県民がつくる学びの輪」をテーマに、博物館と大学との連携が地域に果たす役割を考えるシンポジウムを開催し、県内外から約120名の方にご参加いただきました。

三重県と三重大学は、平成21年3月、新県立博物館整備に関する連携協定を締結し、相互に協力していくこととしました。この連携シンポジウムは、その取組の一つです。

「博物館で学びがおこるとき」

今年度は、「学び」に視点をあて、基調講演者として、京都大学総合博物館の大野照文館長をお迎え

し、「博物館で学びが起るとき」と題して講演をいただきました。市民に開かれた大学博物館をめざし、「物から入る学びの楽しみ」を導入した体験学習プログラムの開発や、「週末子ども博物館」や小・中・高等学校への「出前授業」などを通じて、子どもたちに本物に触れる感動を伝える数々の取組を紹介していただきました。



大野館長の基調講演



会場の様子



パネルディスカッション

パネルディスカッション

後半は、三重大学大学院生物資源学研究科教授の吉岡基さんをコーディネーターに、三重大学教育学部教授の後藤太一郎さん、滋賀県立琵琶湖博物館主任学芸員の芦谷美奈子さん、自然観察指導員三重連絡会会長の木原寿子

さん、津市立一志中学校教諭の吉田啓子さん、県新博物館整備推進室顧問の布谷知夫さんの各パネルから日頃の取組について紹介いただくとともに、それぞれの立場から新県立博物館への期待を語っていただきました。

お知らせ

三重県生活・文化部新博物館整備推進室と三重県立博物館は、来年度から組織を一体化します。事務所は、三重県立博物館(下記)になりますので、平成23年4月以降は、下記へご連絡いただきますよう、お願いいたします。

平成23年4月以降の連絡先

〒514-0006 三重県津市広明町147-2
三重県立博物館内

TEL : 059-228-2283 (代表)

FAX : 059-229-8310

E-mail : shinhaku@pref.mie.jp

三重県生活・文化部 新博物館整備推進室

〒514-8570

三重県津市広明町 13 番地

TEL : 059-224-2175

FAX : 059-224-2408

E-mail

shinhaku@pref.mie.jp

(電話・FAX は左記に変わります。)

新博物館の情報は、ホームページ
でご覧いただけます。

↓
[http://www.pref.mie.lg.jp/
SHINHAKU/HP/](http://www.pref.mie.lg.jp/SHINHAKU/HP/)